

“いにしえのかわにし” 4

た だ ぎ ん だ ん ぎ ん 山 最 後 の 製 錬 所 「 平 安 製 錬 所 跡 」



川西市郷土館にある平安製錬所跡

江戸時代の初めに最も栄えた多田銀銅山は、代官所が現在の猪名川町銀山に置かれたことや、太閤埋蔵金伝説も影響して、猪名川町銀山地区というイメージが強いようです。実は、多田銀銅山のもう一つの拠点は、川西市北部の下財町(げざいちょう)にありました。銀山代官所配下の役所も置かれ、吹屋の建ち並ぶ製錬町だったので。

現在、下財町にある川西市郷土館(下財町4-1、月曜日・年末年始休館)は、昭和63年(1988)に平安家の住宅を市が買い取り整備したのですが、平安家こそ明治以降も銅製錬を営んだ「多田銀銅山最後の製錬所」にほかならないのです。建物は残されていませんでしたが、旧平安邸の裏側にかつて製錬所があったということは、地域の人々の記憶に残されていました。

その実態を明らかにしたのは、平成5・6年に市教委が行った発掘調査です。調査では、煙突の残骸と思われていたレンガの構造物が製錬第2工程の「真吹炉(まぶきろ)」であったことや、脇に立つコンクリートの台座が炉の燃焼を助けるための送風機施設であることがわかりました。また、ここで働いていた人も近隣にまだ住んでおられたこともあり、大正から昭和初期にかけて、昼夜分かたず稼働していた製錬所の様子をうかがうことができました。しかし、送風機等の近代設備を導入したものの、昭和10年代には「真吹炉」という江戸時代以来の製錬法も時代遅れとなり、経済不況も重なって製錬所は閉鎖されたようです。

現在製錬所跡は、郷土館内の青木・平通両画伯記念館「ミュージー レスポアール」横に残されています。平安家に残された鞆(ふいご)等の製錬道具を展示した旧平安邸内の鉱山資料展示室と合わせてご覧ください。